

第一次大戦末期のイラン民族解放運動についての一考察 — Jangal 紙を中心に —

黒 田 卓

I

第一次大戦の開始とともに、イランはその中立宣言にも拘らず、交戦国間の戦場と化した。1907年英露協定によりロシアの「勢力圏」に画定された北部イランを主戦場としたツァーリ・ロシア軍に対し、ロシア革命以降は専らイギリス軍に抗して、ギーラーン地方に密生する森林^{ジャンギャル}を根拠に武装バルチザン闘争を展開したのがジャンギャリー（Jangalī）運動である。1916年頃に抬頭するジャンギャリー運動及びボリシェヴィキの軍事力を背景に1920年6月から翌年秋頃まで存続する「ギーラーン共和国」は、第一次大戦末期から後にかけて高揚する一連の民族解放運動のハイライトでもあった。ドイツ、トルコの影響がジャンギャリー運動に色濃く刻印され、ロシア革命が国境を越えて波及し、成立間もないソビエト外交が「共和国」の命運を左右したという経過からも窺えるように、所謂「ギーラーン革命」は大戦間とその後の国際関係が創出した「国際革命」としての一側面をもつ¹⁾。他方、1911年に立憲革命が敗退して以降の国内政治動向も当然のことながら捨象し去ることはできない。レザー＝ハーンによるパフラヴィー朝創始を可能たらしめた一契機も、「共和国」の消滅という前提条件が存在したからである。

ジャンギャリー運動は「ギーラーン革命」の前史または第一段階として従来位置付けられている²⁾が、「共和国」誕生後の変転極まりない内部権力闘争の分析に比して、十全

-
- 1) このような視角より「ギーラーン革命」を分析したものとして、山内昌之「ロシア革命と西アジア＝イスラム世界における国際革命と民族解放の接点一」『歴史学研究』409, 1974・がある。
 - 2) 「ギーラーン革命」を最も早い時期に研究対象とした Ирандуст (В.П. Осетров) がジャンギャリー運動を前史 (пред'история) として以来、欧米の研究者はほぼ同様の段階設定を踏襲している。См. Ирандуст, Вопросы гиланской революции, Историк-марксист 5, 1927. 加賀谷氏は「ギーラーン革命」を3段階に分類し、「共和国」成立前のジャンギャリー運動を第一段階として考察されている。加賀谷寛「イランにおけるレザー＝シャー政権の成立」『岩波講座・世界歴史』25所収；『イラン現代史』近藤出版社, 1975。

な論及がなされているとは言い難い状況である。運動参加者の一人である E. Fakhra'i はジャンギャリー運動の初期、即ち「共和国」成立前の目的を、

魅力的な一握り (mosht) の言葉や成句から組成されていたのではなく、政治的・社会的・経済的な思想・思考を包含していたのでもなく、当時の一般的な諸条件に応じて、以下のような数語に要約されていた。外国勢力の追放、治安の確立と不正の根絶、私利私欲・専制との闘争。[FAKHRĀ'Ī: 51]

と記し、現実に即応した極めて限定されたものであったことを証言している。この説明が正確とするなら、ジャンギャリー運動や同運動を指導したエッテハーデ＝エスラーム委員会 (Heyat-e Ettehad-e Eslām) をパン・イスラミストと無前提的に規定してしまうことは一面性の謗りを免れえないであろう³⁾。なるほど、ジャンギャリー運動は「イスラムの統一」を掲げはするが、後にみるように、パン・イスラミズムが民族解放という位相とどう接続するののかという問題こそがまず究明されるべきだからである。

そこで、彼らの実際の主張に即して検討することが是非とも必要となってくるが、その際好材料を提供するのがジャンギャリーの発行した「*Jangal*」紙である。1905～11年の立憲革命期以来、新聞発行はイラン民族運動の伝統的手法の一つになる⁴⁾が、我が国においては新聞資料を利用した研究は緒についたばかりである。勿論、一概に新聞といっても、特定意見を表明する「意見紙」が大半であり、「*Jangal*」紙もその最典型であるので、記されている所に全幅の信頼をおくことができないことは言うまでもない。

しかしながら、他史料との比較考量を行なう上で、有効な判断材料になりえることもまた確かである。幸いにも「*Jangal*」紙は近年イランにおいてその第1年次 (sal-avval) 分が完全な形で復刻された⁵⁾。小稿はジャンギャリー運動の総合的評価を下すこ

3) この分野におけるソ連邦の第一人者 Иванова はエッテハーデ＝エスラーム委員会を「ブルジョワ民族主義、パン・イスラミズム組織」と並称するのみで等閑視し〔Иванова 1955: 48〕、「*Jangal*」紙を「パン・イスラミズム的傾向をもつ」と記している〔Иванова 1961: 30〕。

4) 立憲革命期における新聞発行については、八尾師誠「イラン立憲革命と新聞―『*Anjoman*』紙の分析にむけて―」護雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社、1983、所収を参照のこと。

5) 復刻本には、出版年が記されていないが、序に「Kuchek Khan 殉教60周年を記念して」とあるから、1980年以降であろう。また、通し頁も付されていないので、利用に際しては〔“*Jangal*”: 何号/何頁〕という形で示すことにし、発行日については本稿87頁の表を参照されたい。なお、同書の内容については東京外国語大学の八尾師誠氏に御教示を受けた。記して感謝の意を表したい。

とを企図するのではなく、評価を検討する過程で不可欠の素材となる「*Jangal*」紙を紹介し、併せて幾つの特徴を点描することにした。

II

本題に入る前に、当時のジャーナリズムの状況を概観しておこう。第2次国民議会の特質の一つは相異なる二大政党、保守派のエッテダールユニオン (Ejtemā'iyūn-e E'tedāliyyūn) と進歩派のデモクラート (Demokrāt-e 'Āmiyyūn) とが出現したことである。かかる政治勢力の分化傾向と相俟って、政党関連紙が創刊されるようになり、とくにデモクラート党はテヘランで日刊紙「*Īrān-e Nou*」(1909年8月刊)、タブリーズで「*Shafaq*」紙(1910年10月刊)を発刊し、活発な論陣を張った〔BAHĀR:10〕。発行新聞点数も1909年には31紙、1910年36紙、1911年33紙と量的には第1次立憲制期(1907年84紙、1908年31紙)と比較しても遜色がない程の活況を呈したのである〔BROWNE:26〕。

ところが、1911年末からのロシアの軍事干渉とイギリスの黙許が立憲革命を潰滅させてから、第3次国民議会開設(1914年11月)までの約3年に亙る期間は、議会も閉鎖され、出版の自由も抑圧されるという「絶対的的反動期」(doure-ye ertejā'-ye moṭlaq)に相当した〔ĀRYANPŪR:223〕。例えば、「*Īrān-e Nou*」紙は休刊に追い込まれるや、「*Īrān-e Novīn*」紙をその代替にして抵抗を示したが、1号出た所で早くも停刊処分を受け、更にタブリーズでのロシア軍による蛮行を載せた「*Rāhbar-e Īrān-e Nou*」紙は軍当局により強制的に出版を差し止められるに至ったという。全出版物が文部省(vezārat-e 'olūm o ma'āref)出版物局(edāre-ye maṭbū'at)の許可を受けることを余儀なくされた〔KOHAN:619—620〕。

アフマド＝シャーの戴冠、第3次議会の開設に伴い、このような状態は緩和され、数多くの新聞が「春の雨の如く、樹木の開花の如く、自由(āzādī)を活性化させた」〔KOHAN:640〕のである。テヘランの主要紙としては、デモクラート系の「*Nou Bahār*」紙が「*Īrān-e Nou*」紙に代わって再刊され、同じくデモクラート系の「*Setāre-ye Īrān*」紙、エッテダール系の「*Shūrā*」紙、エッテハーデ＝エスラーム派支持の「*Bamdād-e Roushan*」紙、他に「*Ra'd*」紙、「*Asr-e Jadīd*」紙などが発行された。第一次大戦勃発という事態に直面した当時のジャーナリズム界を「*Nou Bahār*」紙の編集者であったM. Bahārは次のように回顧している。

これら総ての新聞の中で、ただ「*Ra'd*」紙と「*Asr-e Jadīd*」紙だけが連合国、即ちロ

シアとイギリスを明確に支持してものを書いたが、ツァーリ・ロシアの行動とイギリスの深い沈黙から彼らの専横的行為に対して抱いていた強烈な印象と党の先例への配慮の故に、大部分の諸党党员と絶対多数の新聞人が戦争の当初より同盟国の支持に関心を示したといい程、連合国側に憤りを覚えていた。〔BAHĀR : 15〕

因みに、許可された新聞数を *RMM* 誌上に掲載された新聞・雑誌リストによって年度別に列挙しておくならば、A.H. 1330年 (1911. 12. 22～) 2紙, 1331年 (1912. 12. 11～) 9紙, 1332年 (1913. 11. 30～) 14紙, 1333年 (1914. 11. 19～) 18紙, 1334年 (1915. 11. 9～) 2紙, 1335年 (1916. 10. 28～) 12紙, 1336年 (1917. 10. 17～) 7紙である (括弧内はヒジュラ暦の年初を西暦に直した年月日)〔Nô ROUZE : 37—44〕。これらのデータによると、立憲革命期には遠く及ばないにせよ、認可紙数における一つのピークは1914～15年頃であったことが知れるのである。

III

「*Jangal*」紙に関する基礎的な情報の素描をここでは試みることにしたい。下表のよ

表. “*Jangal*”紙第1年次発行状況

号	発行日		①	号	発行日		①
	A.H.	A.D.			A.H.	A.D.	
1	Sha'ban 19 ^②	6・10 ^③	○	17	Şafar 8	11・23	○
2	Sha'ban 26	6・17		18	Şafar 16	12・1	○
3	Ramazān 6	6・26		19	Şafar 23	12・8	○
4	Ramazān 12	7・2		20	Rabr'I 6	12・20	○
5	Shavval 1	7・21		21	Rabr'I 18	1・1 ^⑤	○
6	Shavval 11	7・31		22	Rabr'I 29	1・12	○
7	Shavval 20	8・9		23	Rabr' II 10	1・23	
8	Dhr'l-Qa'de 5	8・23		24	Rabr' II 23	2・5	
9	Dhr'l-Qa'de 16	9・3		25	Jomada I 8	2・19	○
10	Dhr'l-Qa'de 28	9・15	○	26	Jomada I 19	3・2	
11	Dhr'l-Hejje 10	9・27	○	27	Jomada II 7	3・20	
12	Dhr'l-Hejje 17	10・4	○	28	Jomada II 15	3・28	○
13	Dhr'l-Hejje 24	10・11	○	29	Rajab 10	4・21	○
14	Moħarram 2 ^④	10・18		30	Rajab 20	5・1	
15	Moħarram 23	11・8	○	31	Sha'ban 17	5・28	
16	Şafar 1	11・16	○				

〔表註〕 ① *charand parand* 欄の有無 ②以下1335年 ③以下1917年 ④以下1336年 ⑤以下1918年

うに、「*Jangal*」紙の創刊号は1917年6月10日付、第1年次の最終号である第31号は1918年5月28日付であるが、Fakhrā'iによれば、第2年次は4号分発行されたという〔FAKHRĀ'I:148〕。この4号分は復刻本に所収されていないので、発行がいつ途絶したか不明であるとはいえ、表からも分かるように、ほぼ毎月3号程度の割合で発刊されていること、第2年次がA.H. 1336年 Sha'ban 月19日（1918年5月30日）以降に始まる筈であることを併考するならば、1918年7月上～中旬と想定しても大過なからう。但し、第1年次末期には定期的やや混乱が見出せるから、8月上旬頃まで発行が続いた可能性もある。何故、突然のように発行が絶えたかを推測するとき、上述の1918年7～8月上旬に中断したという推定が概ね妥当だとするなら、ジャンギャリー運動がこの時期に遭遇していた事態が想起されよう。

1918年6月にDunsterville 将軍率いる英特殊部隊が Бичерахов 大佐麾下のロシア・カザーク白衛軍と共に、ギーラーン方面に北進し、同月12日にはManjil 近辺でジャンギャリー部隊を打ち破り、一時ギーラーンの中心都市ラシュトをも占領下に置いた。Kūchek Khān を長とするエッテハーデ＝エスラーム委員会とDunsterville 軍間に、8月12日協定が成立し、ジャンギャリー側は「英軍のために必要な食糧を準備すること」や「イギリス人捕虜の送還」などに同意し、英軍は「イランがイギリスの敵に協力し、反英行動をとる場合を除いて、イランの国内事情に干渉しない」、「イギリスの敵を利することをしない限り、エッテハーデ＝エスラーム委員会の目的に敵対しない」などを約定した〔FAKHRĀ'I:153—155; Иванова 1961:68—69; DUNSTERVILLE:87—88〕。エッテハーデ＝エスラーム委員会のイギリスによる認知と引き換えに反英闘争を抑制するという妥協的立場が、ジャンギャリーの反英論調を鈍化させ、内部に亀裂を生起せしめ〔FATEMI:218〕、ひいては「*Jangal*」紙発行を窮地に陥れる一要因となったことは想像に難くない。

M. Ṣadr Hashemī は「*Jangal*」紙発行期間をKūchek Khān とその同調者のラシュトからの退去、つまりA.H. 1338年 Dhī'l-Qa'de 月初（1920年7月後半）までとする〔ṢADR HĀSHEMĪ:172〕。加えて、Иванова が「*Jangal*」紙の1920年7月6日付から引用したり〔Иванова 1961:86〕、Абих が同紙は1916年から20年まで発行されたという写真解説を付したり〔Абих:130〕、更にはZabih がBibliographyにおいて*Jangal* (Resht; daily and irregular, 1919—1921) などと記している〔ZABIH:273〕から、復刊もしくは同名紙の刊行という可能性も残されている。筆者は現物所在を未だ確認していないために、これ以上の言及は差し控えたい⁶⁾が、Kohan の記述による限り、Ṣadr

6) 例えば、M. Solṭānī(ed.), *Fehrest-e Rūzname-hā-ye Fārsī dar Majmū'e-ye Ketābkhāne-ye Markazi va Markaz-e Asnād-e Dāneshgāh-e Tehrān*, jeld-e 1, Tehrān, S.H. 1354. によると、テヘラン大学も「*Jangal*」紙第1年次第29号分までを所蔵しているにすぎない。

Hashemī の説は誤りであり、「共和国」成立以降は壁新聞 (rūznāme-ye dīvar-kub) 「Rūstā」, 「Enqelab-e Sorkh」紙 (数号のみ発行) が「Jangal」紙に取って代わり, Eḥsānollah 政権誕生後は「Kāmūnist」紙 (イラン共産党〈ボ〉機関紙) が発刊されたのだという [KOHAN : 742]。

さて, 「Jangal」紙は 'Alī Ḥabībī なる人物によって nasta'liq 体で手書され, 石版 (sangī) により印刷された。編集者 (modīr) は第 1 号が Gholamḥoseyn Novīdī, 第 2 号から第 13 号までが Ḥoseyn Kasmā'ī⁷⁾, それ以降は再び Novīdī であったが, 事実上第 9 号以降, Ḥoseyn Kasmā'ī は病気を理由に引退していた [FAKHRĀ'Ī : 141—142 ; “Jangal” : 14/8]。先に触れたように, 出版物は文部省の許可が必要であり, 同紙も許可 (emtiyāz) を要請してはいる [“Jangal” : 1/1] が, 第 25 号に至っても許可を受けていない旨の記載があり [“Jangal” : 25/8], また既出の新聞・雑誌リストにもその名がみえないので, 恐らく全期間を通じて無許可で刊行されていたものと思われる。

タイトル・ページ (sar-e louḩe) には, 「本紙は唯一イラン人の諸権利の擁護者, イスラム教徒の世論の啓発者である」とのスローガンが毎号掲げられ, 「一部, 7 shahī, 「購読料, 年間, 50 qerān」なる価格が表示されている。また, 同ページに編集局所在地も記されており, それによると, ラシュト西方, Fūman 近在の Kasmā' という町であり, 同地は 1911 年頃に戸数 1700 余戸の規模であった [RABINO : 168]。このような場所における新聞発行は必然的に諸困難を伴うものであり, 「Jangal」紙自らその窮状を訴えている。

明らかに, ギーラーンの一村に献身的な執筆陣を形成し, 一新聞の執筆・出版・配布手段を整備することは, 現下の世の状況, 今日の恐るべき戦争, この戦争前には容易に入手できたであろう物質の完全な欠乏下では極めて困難な仕事である。[“Jangal” : 2/1]

では, いかにして同紙は配布されたのであろうか。それを推察する手掛りとなる記事が第 8 号に掲載されている。ラシュト郵便局が定期購読者に配布しなかったために, 苦情の手紙がラシュト, アンザリー, ラーヒージャー, テヘラン他の読者より編集局に寄せられ, ラシュトにいる同紙の代理人 (vakīl) が郵便局と掛け合ったという [“Jangal” : 8/7—8]。代理人の名は第 17 号に Mīrza Ja'far Ḥasanzāde Zanjānī とみえ

7) Ḥoseyn Kasmā'ī の略歴などについては, 拙稿「イラン立憲革命におけるラシュト蜂起」『史林』61 (1), 1984, 54—55 頁を参照のこと。

〔“*Jangal*”: 17/6〕, 第1年次末の月号では、この Ḥasanzāde という者がラシュト市内レース商店街 (rāste-ye ‘alāqebandan) に所有する店舗または家屋が販売所 (forushgah) として指定されている〔“*Jangal*”: 25/7, 26/8, 30/8〕。即ち、郵便局からの郵送と販売所での一部売りという配布方法が併用されていたと考えられるのである。

次に紙面の特徴に移ろう。第1年次の総ての号は8頁立てで、各頁の中央より縦線を引き、2つのコラム (sotūn) に分け、第19号以下では数頁に亘って下方に横線を引いてもう一つコラムを作っている場合がある。記事構成の概容は、トップに時々の政治的主張や論説が掲げられ、以下、エッテハーデ=エスラーム委員会の送受した電報・書簡原文、ロシア語・アゼリ語新聞からの抄訳、読者からの手紙、(ラシュト)市の情報、文学欄 (殆どが詩であり、時にはギーラーン方言 *Gilakī* の詩が掲載される)、編集局からの告知・謝罪・感謝などが適所に配列され、最終部には諷刺を主内容とする *charand parand* 欄が付置される場合が多い⁸⁾ (表参照)。

「*Jangal*」紙は発刊の趣意と文体との相関関係について、

本紙創刊の基本的目標を我々は世論を啓発し、国民を無知蒙昧の眠りから覚醒させることと考えてきたし、考えている。しかも、難解に述べる (moghlaq gū’ī) のではなく、平明に記すること (sāde nevīstī) が肝要である〔“*Jangal*”: 20/1—2〕とし、プロパガンダの手段としての同紙の性格を端的に表明しているのである。

IV

ここでは、記事内容の一端を紹介することとし、内容の分析は若干のコメントを付記する程度に留めておきたい。まず、第一次大戦への評価にかかわって、

ほぼ大戦の全期間を通じて (イラン国民は) 他人の勝利に一喜一憂してきた。… (中略) …我々は次のようなことに無知であったし、恐らく今もそうであろう。即ち、あれこれの勝利や敗北は我々を屈辱と不幸の渦から救出しないであろうことを。確かに、我々の生存から利を得る国の勝利と唯一我々の消滅がその視座にある国の前進との間には天地の差があるが、この両国のどの一国とて我々の鎮痛剤にはならないであろう。

8) *charand parand* 欄で有名な「*Šūr-e Esrāfil*」紙編集者 *Mīrzā Jahāngīr Khān* の名を永遠に残すために本欄をおくとしている〔“*Jangal*”: 1/8〕。なお、*Jahāngīr Khān* はモハンマド=アリー=シャーのクーデタ (1908年6月) の際に処刑された。

〔“Jangal”: 3/1〕

「生存から利を得る国」はドイツ、「消滅を望む国」はロシアが革命で脱落した以上、イギリスに仮託されているのであろう。そこには、親独的心情の残滓が認められるとはいえ、大戦末期という時代状況も投影し、自省の念を踏まえた上での、全外国勢力の侵略・干渉からの脱却、換言すれば「言葉の完全な意味において、いかなる外国政府からの介入・指図もない独立」〔“Jangal”: 28/2〕への願望が込められているといっても過言ではない。

第9号には「南部イランにおけるイギリス」と題する論説が載り、イギリスの南部イラン領有の意図の背後には、石油を始めとする鉱物資源の確保、ペルシア湾の位置的重要性があるとする一方、パン・ゲルマニズムへの支持が訴えられている〔“Jangal”: 9/6—7〕。ところが、実際には、このような露骨なドイツ支持の記事は大変例外的で、第15号ではロシアのある新聞紙上での、ジャンギャリーが「オスマン政府と連合し、ドイツ・トルコの資金で決起した」との批判に対して、あらゆる外国政府との政治的連合関係を否定している〔“Jangal”: 15/3〕。むしろ、各号を貫く基調は激しい反英論である。イギリスによる南部警察隊 (polits-e jonub) 創設を植民地化への一里塚と見做して激しい反英プロバガンダを繰り広げる第12号〔“Jangal”: 12/2—4〕、鉄道を建設させず、イランをインド・ロシア間の緩衝地にしたなどのイギリスによる介入経過を略述した第26号〔“Jangal”: 26/3—4〕、英軍との直接的軍事対決が不可避という状況下における、一種の反英決起への檄文ともいえる第29号〔“Jangal”: 29/1—3〕など、例には事欠かないが、イギリスの二枚舌的外交政策を巧みな比喩によって剔出した記事の一部分を一例として、以下に挙げておく。

ブリタニアは専制者である。ブリタニアは正義の敵である。ブリタニアは被抑圧民族の敵である。ブリタニアは一世紀に亘って抜け目のない老婆のように我々を苦しめ、美しくはないが、愛される顔を相手の心に焼き付けさせ、常に詐術的陰謀で自分の冷酷かつ嫌悪された顔面に一種の媚態と美貌を作り出し、ロンドンの政策の特質であるごまかしとペテンで、単純な相手を欺き、あるときは力と実力行動で、またあるときは巧みな手段で佞媚と狡猾を利用する。〔“Jangal”: 16/3〕

一方、2月革命後のロシアへの対応はどうであろうか。ケレンスキー政権は1917年7月に司令官 Баратов に対してロシア軍のイランへの侵攻の中止と可及的早期撤退を命じた〔FATEMI: 135〕。ジャンギャリーはこれに対し繰り返し「言葉には実行が必要」として友好関係樹立と軍撤退実現を対置する。

我々は自由ロシアに何を期待するか。我々は期待する、自由ロシアがこれ以上、イギリスの（政策）遂行の道具とならず、イランから自軍を撤退させることを。我々は期待する、民主ロシアが北部から我々を安全にしておくことを、我が活動家の思念と行動がイギリスの不法な干渉を阻止することに費やされるように。我々は期待する、革新ロシアが、イランへの軍隊導入が何の利益ももたらさないばかりか、逆にその利益が許欺的なイギリスの収益になってしまうだろうという点に注意を向けるとともに、ロシア残留軍が現存する飢餓に再び更なる荒廃を増加させ、何千もの人々の存在が同軍の略奪で風に消え、空腹で死に絶えようという問題にも注目することを。…（中略）…我々は期待する、自由ロシアが新旧の不当な利権取り消し、有害な条項と古く不法な条約の改訂、我々の独立を抹殺するような総てのことの破棄（を行なう）にとどまらず、イギリスがイランを他の併合地と同様に捕われの鎖に結びつけることを許さないために、実際の援助 (mosa'edat-hā-ye 'amālī) により我々を助けんことを。

〔“Jangal”: 11/3〕

第23号では「ロシア軍は帰還している」と題して、ロシアでの最近の流血の事件（10月革命を指す）を悲しんだ後に、ラシュト駐留ロシア軍司令部とエツェハーデ＝エスラム委員会との間の兵士引揚げに関する相互協定の^{プロトコール}議事録を詳報する〔“Jangal”: 23/2—5〕。ただ、10月革命に関する記事は情報不足のためか、殆ど見受けられず、僅かにボリシェヴィキ政府が派遣した最初の外交官 Бравин の公式承認をテヘラン政府に迫っている記述などが散見せられる程度である〔“Jangal”: 26/5, 30/1—2〕。

ところで、第28号では「我々は何を言い、何を望むのか？」という中見出しで、ジャンギャリー運動の主要点が要約されており、その中で、刮目に値する点が2つ提示されている〔“Jangal”: 28/1—2〕。第一は、パン・イスラミズムとナショナリズムとの関係である。ジャンギャリーのいう「イスラムの統一」とはイスラム教徒の対立が共通の敵を利することを防ぐための兄弟的關係なのだという。国家の枠組を越えたイスラム世界の統一が直接的目標とされているのでは決してなく、「イランの国土とイラン人の聖なる祖国を守る責任と責務が、我々の考えでは、総てのイスラム諸国・諸地域に優先される」、つまりイラン人としての義務 (vaḡā'ef-e Īrāniyyat) こそが第一義的だとされているのである。第二の点は、国家改革のプログラムに関してである。独立を達成した後の課題として強調している問題は、国家諸機関の腐敗 (fasād-e tashkīlat) を一掃し、政府 (doulāt) に集権性 (markāziyyat) を付与するということである。示唆的かつ抽象的であるにせよ、「集権的政府」が志向されていること自体、後の「共和国」の分離独

立という事実と対比するなら極めて興味深い問題なのである。

ジャンギャリーの合言葉「イランはイラン人のものである」に始まり、ジャンギャリーの要求する所を列記した一文中に次のような箇所がある。

ジャンギャリーは言う、イラン人自由戦士 (ahrar) の12年間の労苦とイラン人勇者の犠牲はこれ以上不毛に留まってはならないし、イスラム信仰とイラン古来の政府が一握りの無信仰のごろつき (alvat) の玩具となってはならない。… (中略) …ジャンギャリーは、1327年 (1909年…筆者註) にアゼルバイジャンの情熱的人士の献身性に触発されて決起し、「レヴォリューション」完成・^{エンゲラフ}革命の達成・専制の根絶・立憲制回復に成功したのと同様、今次も彼らの最終目標はイランの貴重な移住者 (mohajerin) と南部の献身者 (fedā'iyān) との協力、イラン人勇者の努力、世論の支持により外国人追放・国家改革に成功することである。[“Jangal”: 13/3]

引用文中に述べられる「12年間の労苦」や立憲革命期におけるラシュト蜂起とのアナロジなどには「挫折せしめられた立憲制」への憧憬さえ感得せられるのである⁹⁾。ジャンギャリー運動が「1909年の勝利に続いた幻滅と落胆への誠実な反応」[KATOUZIAN : 534] とも評される所以である。

本来ならジャンギャリーの対政府、対シャー関係などにも関説し、「Jangal」紙を総体的に分析・把握すべきであったが、紙幅の関係もあり、他日を期したい。

参 考 文 献

Абих, Р. Национальное и революционное движение в Персии в 1917-1919 гг. Новый Восток 26-27, 1929: 125-161.

ĀRYANPŪR, Y. *Az Šabā tā Nīmā*. jeld-e 2, 5th ed., Tehrān, S.H. 1357.

BAHĀR, M. *Tārīkh-e Mokhtašar-e Ahzāb-e Siyāsi, Enqerāž-e Qājāriyye*. Tehrān, S.H. 1323.

BROWNE, E.G. *The Press and Poetry of Modern Persia*. Cambridge U.P., 1914.

DUNSTERVILLE, L.C. Military Mission to North-West Persia, 1918. *Journal of the Central Asian Society* 8, 1921 : 79—98.

9) 「政府とは何か」と題する記事中に、12年間の立憲制期に政府内閣の手に統治権を委ねたが、「我々は損害を受け、損傷を被り、我々が持っていたものを失い、最早何もなくなってしまった。」ともみえる。[“Jangal” : 27/5—6]

ФАКХРĀĪ, E. *Sardār-e Jangal, Mīrzā Kūček Khān*. 5th ed., Tehrān, S.H. 1354.

FATEMI, N.S. *Diplomatic History of Persia, 1917—1923*. New York, 1952.

Иванова, М.Н.

1955 Национально-освободительное движение в гиланской провинции Ирана в 1920-1921 гг.

Советское Востоковедение 3, 1955: 46-55.

1961 Национально-освободительное движение в Иране в 1918-1922 гг. Москва, 1961.

"Jangal" *Selsele-ye Rūznāme-hā-ye Jangal, Nashriye-ye Nahzat-e Enqelābi-ye Jangal*.

Tehrān, n.d.

KATOUIAN, H. Nationalist Trends in Iran, 1921—1926. *IJMES* 10, 1979 : 533—551.

KOHAN, G. *Tārīkh-e Sānsūr dar Maṭbū'at-e Īrān*. jeld-e 2, Tehrān, S.H. 1362.

NÔ ROUZE, A. Registre analytique annoté de la presse persane (depuis la guerre).

RMM 60, 1925 : 35—62.

RABINO, H.L. Les Provinces caspiennes de la Perse, le Guflān. *RMM* 32, 1915—16.

ŞADR HĀSHEMĪ, M. *Tārīkh-e Jarā'ed va Majallat-e Īrān*. jeld-e 2, Eşfahān, S.H. 1328.

ZABIH, S. *The Communist Movement in Iran*. California U.P., 1966.